

地方創生としての仕事づくりイベント

農業部門 吾郷秀雄

1. はじめに

国では地方の人口減少が深刻であることを踏まえ、東京一極集中を是正しつつ地方の人口増を図るために、人口減少対策と地方の成長力確保を目的した「まち・ひと・しごと創生法」（地方創生関連法）が平成 26 年度に可決され、都会から地方へ移住を促したり、地方で働き場所を増加させる政策が推進されている。

この創生法に基づいた地方創生事業の特徴は、相互に関連する政策分野（移住と住宅、雇用など）や官民の境界領域（まちづくりと観光や特産品開発など）に横串を刺して柔軟に取り組めることに加え、地方創生推進交付金については 5 年間という比較的長期にわたり支援が得られ、ハード・ソフトを含めて高い自由度をもって一体的に取り組めることである。

国の取り組みを受けて、島根県 A 市の B 町では平成 27 年度から 4 カ年計画として地方創生交付金を活用したモデル事業が進められている。本稿では 3 年目の平成 29 年度に実施された 5 回に亘る仕事づくりイベントの活動について考察をしてみたい。なお筆者は同イベントのワークショップ（以下、「WS」という）のファシリテーターを担当した。

2. 仕事づくりイベント事業の概要

(1) イベントの目的

平成 29 年度の当初計画には、県外からの移住希望者を集めた田舎ツーリズムが計画されていたが、他地域でも同様な事業が実施されて移住希望者の取り合い状態になっているため、当初計画を変更して、年 5 回に亘る「仕事づくりイベント」（以下、「イベント」という）が、地元の NPO に委託して実施された。

イベントの目的は、①町内に新たな仕事や地域活動が創出される、②町内の人と町外の参加者（又はゲスト講師）が繋がり今後の地域づくりに寄与できる人的ネットワークがつくられる、③地域外参加者だけでなく地元の人にも地元の地域資源や将来に向けた可能性に気づいてもらう、とされた。

(2) イベントの全体概要

イベントの構成はゲスト講師の講演、地元講師の発表、そしてそれらを踏まえたワークショップ（WS）の 3 部構成である。各回のイベント概要は次のとおり。

表-1 イベントごとのテーマと講師の概要

回数とテーマ	講師
第1回：海資源を活かした仕事づくり、5月開催	ゲスト講師は高知県室戸市の一般社団法人代表、地元講師4人
第2回：商売と地域づくり、7月開催	ゲスト講師は元学生マルシェ代表、地元講師4人
第3回：人づくりと地域、9月開催	ゲスト講師は塾代表、地元講師3人
第4回：農と仕事づくり、11月開催	ゲスト講師は奥出雲町の農的生活実践者、地元講師4人
第5回：チャレンジ発表会、平成30年1月開催	ゲスト講師はNPO法人代表、地元活動発表者5人

3. 第1回イベント「海資源を活かした仕事づくり」の概要とその結果

(1) 講演や発表の概要

○ゲスト講師：高知県室戸市の一般社団法人代表

- ・ 室戸市では、大量に水揚げされるマルソウダガツオが安価で販売されていたため加工に取り組んだが、従来の加工方法しか思い浮かばなかった。東京や大阪の飲食関係者に魚を送ったり、ツアーを企画して様々な人たちと交流する中で、コンフィ（素材を油に浸した料理）が提案され、今では高知県内外の多くの飲食店で使われ好評である。
- ・ 商品開発のコツは「横のつながり」である。それまで違う世界にいた人同士が出会い話合えば、思わぬ「化学反応」が起きる。横のつながりにより、この他にも「入浴剤のバスボム」：農家×化粧品会社×病院、「Gift商品」：地元生産者×デザイナー、などの成果が出ている。

○地元講師：定置網事業者

- ・ 定置網は沖合い4kmに設置されている。従業員数はH29年には12人（うち事務員1人）で、若手は少なく、平均年齢は49歳。売上はH28年度が2.1億円と少し伸びた。
- ・ 課題は「魚が捕れれば捕れるほど作業量は増えるが、値段が下がる」し、また「若い人が魚を食べない」ことである。

○地元講師：定置網漁の従業員兼個人漁師

- ・ 定置網会社に勤務し、余った時間に個人漁師をしている。個人漁師だけでは季節毎に漁獲制限があり経済的自立が難しいため、朝起きてから昼過ぎまでは定置網で仕事をし、その後の自由な時間に個人漁師をしている。
- ・ 個人漁師としては①刺し網漁、②藻類、③貝類、④一本釣りの4分野を行っている。課題は特にない。

(2)WS の結果

WS では次のような案がだされた。

- ・ 異業種との交流が大事で、漁師・小売・仲買など枠を越えた集まりができると、思わぬ化学反応が出て面白い。
- ・ 昨今、魚を切り身でしか買わない人も多い。20代30代の若者、特に子育て中のお母さんを対象にして、出前講座で**魚の捌き方の教室**もいい。
- ・ 地域の住民が食べている食べ方（やなぎかけごはん、ウミシカを食べるなど）といった独自の文化を大事にしていく。

WS で提案された魚のさばき方教室が、平成 29 年 10 月に実施された。

4. 第 2 回イベント「商売と地域づくり」の概要とその結果

(1)講演や発表の概要

○ゲスト講師・元学生マルシェ代表

- ・ 大阪府生まれで、島大学生物資源学部在学中に、県内野菜などの一次産品を大阪の商店街で販売する「学生マルシェ」を起業した。
- ・ 県東部の生産農家に会員になってもらい、自分でレンタカーを借りて運搬して、大阪で米・花・野菜などを販売。生産者名も書いた農産物が好評で、活動がテレビで紹介された後は、集荷が県全域に広がった。しかし平成 27 年ごろから、生産者の高齢化の原因により出荷量が減少したため取り組みを終了した。

○地元講師：道の駅代表と産直店店長

- ・ 道の駅は H10 年 4 月創業で、年間 160 万人が来訪。道の駅に隣接しているベーカリーは、売上 1 億円を突破。女性だけの社員構成で計画したパン屋のため、最初はどううまくいかないのではないかと懸念されたが、次々と新商品を企画して売り上げを伸ばしている。
- ・ 道の駅とは別の産直産品の直売所は、社員が 9 人で、160 人の農家が野菜や加工品を持参し、魚も取扱っている。課題は、生産者の高齢化から出荷量が減少して、慢性的な商品不足の状態であること。

○地元講師・温泉宿若女将

- ・ SNS での情報発信は非常に重要であるが、特に「顔写真を出すこと」が大事と考えて取り組んでいる。最近、温泉に興味を持ってもらうためにちりめん山椒を 2 回作って完売した。SNS による情報発信では、1200 人がフォローしており、個人的なつながりに期待している。

○地元講師：写真館経営者

- ・ 以前は工事用の写真現像プリントが多かったが、その後はデジタル写真になったため工事写真のプリントは全くなくなった。

- ・ 海をバックにした結婚記念写真を撮り始めた。また最近、記念写真を海だけでなく山をバックにしたり、他家の庭を借りて写真を撮らせてもらうこともある。

(2)ワークショップの結果

WSでは、流通班、小売班、宿泊班、風景班に分かれて意見を出してもらった。その結果は次のとおり。

- ・ 体験型の観光企画では、いちじく狩り・オーナー制度、農産物加工体験、地元の人との交流を企画したらどうか。
- ・ 発酵食品の開発（野菜、魚）、珍しい海藻を使ったお惣菜の販売など。
- ・ ここで宿泊してもらう理由づくりとして、朝や夜の魅力を入れた「朝マップ」「夜マップ」を作り、それぞれの時間帯の魅力を発信してはどうか。
- ・ 美しい景観を探しながら、まち歩き&写真撮影をする「Instagram・プロジェクト」をしたらどうか。

5. 第3回イベント「人づくりと地域」の概要とその結果

(1)講演や発表の概要

○ゲスト講師：A市内の塾代表

- ・ 学校での勉強は、本来「学ぶこと」に興味を持つようにすることであるが、大学に入学することが目標になっている。勉強と生活が繋がっていないので、我々が創る必要があると思っている。
- ・ 例えば、外遊びやイベントを教科に繋げる方法としては、農業では面積や割合などの数学の勉強、雨や湿度などから理科を勉強できる。
- ・ 子供たちには体験や経験を通して、心を育て知能を育てる、それが「地域の力」となると考えている。

○地元講師：自然遊び団体の代表

- ・ 町では幼稚園が閉鎖になり、母親クラブもなくなったため、最初は忍者修行遊びから始めた。実施に当たって東京から専門家を呼ぶ必要があったが、資金不足だったため地域のイベントに出店して資金を確保した。
- ・ 現在、子供が遊ぶ森や炊事場を整備中である。整備中の森は子供の遊び場としては急傾斜の場所にあるが、雑木や竹を伐採し登り道にはロープを張り、石などの落下防止のためにネットを張っている。

○地元講師：読み聞かせ団体代表

- ・ 読み聞かせは、子供が大きな声を出してもいい図書館の子供部屋で実施している。
- ・ 読み聞かせの本は子供の成長に合せ、図書館員と一緒に選定している。会

員の年齢は 60 歳以上が多いため、課題はメンバーの高齢化である。

○地元講師：芸術と教育のための活動家

- ・ 7 年前に東京から出雲へ移住。田舎の子供たちに本物の演奏などの新鮮な体験をしてもらいたいと思い活動をしている。
- ・ 子供たちは、知識は学校で学べるが、知恵は学校では学べないので、知恵の一部となる本物の体験や経験の機会を与えたいと考えている。自分の専門の芸術分野で、子どもたちが自分で触って、自分で聞いて、自分で考えて判断する力を養う、というようなお手伝いができたらいい。

(2)ワークショップの結果

地域内外の参加者混合で、「遊び 1」「遊び 2」「文化芸術」「教育」の 4 グループに分かれて議論してもらった。各々のグループの結果は次のとおり。

- ・ 育った子供が、地域の子どもと関わり、また大人とも関わり、遊びを通して世代間交流を考える。
- ・ まち全体で遊ぶイベント（人生ゲームのような）を計画する。
- ・ 町内外の人が気軽に交わる場所・機会をたくさん作る。本当の田舎体験も効果的だと思われる。
- ・ お年寄りと交わる機会（お手玉、かるた、竹遊び）を学校行事に取り入れる。

6. 第 4 回イベント「農と仕事づくり」の概要とその結果

(1)講演や発表の概要

○ゲスト講師：奥出雲町の農的生活実践者

- ・ 12 年前に東京から島根県に I ターンし、6 年前から奥出雲町へ移住。農業、民泊、オーガニックコットンの栽培・販売の活動をしている。
- ・ 奥出雲町で和綿栽培をして品質検査をしたところ、世界トップクラスの品質だった。綿を見るツーリズムも企画している。
- ・ 昨年宿泊者数は 250 人。民泊の人たちの 8~9 割の目的は「U・I ターン希望者」であるが、彼らの希望は農業ではなく「農的な生活」を求めている。

○地元講師：果樹生産部会代表と U ターン民宿経営者

- ・ B 町では、昭和 40 年代から始まった水田転作作物としてイチジク栽培が広がった。最近のイチジク生産部会の人数は 80~100 人で、全栽培面積は 15~17ha。
- ・ U ターンした平成 16 年からイチジク栽培を開始した。完熟のおいしさを味わってもらうためイチジク狩りを始めた。車椅子の人や子供でも収穫

できるように高さを低く剪定している。乾燥イチジクが東京で好評であるため、今後は生果よりも加工に力を入れたい。また平成 21 年から「民泊」をしている。

○地元講師：牧場経営者

- ・ 30 歳手前まで都会でサラリーマンをしていたが、U ターンして酪農を始めた。酪農場所は町内
- ・ の西方の山に囲まれた所である。収入は牛乳と牛の販売。
- ・ 酪農とは「地球最大のリサイクル産業」だと思っている。命をいただいて、命をつなぐお手伝いができるし、また「人を死なない程度に活かす職業」だと思う。

○地元講師：営農団体代表

- ・ 団体は、会員 39 人で平成 28 年に結成。7ha の水稲を中心に、資材の共同購入、水稲受託事業を行い、また環境美化などの地域貢献もしている。
- ・ 平成 30 年度には国の稲作補助金が廃止されるため、隣市の会社への販路が確保されたアカメガシワへの転作を始めた。
- ・ 地域貢献の取り組みとして、小学校の 2 年生と一緒に景観作物のナタネ栽培をし、油を絞って学校給食用に使用してもらっている。

(2)ワークショップの結果

地域内外の参加者が混合で、「グループ 1~4」の 4 グループに分かれて討論してもらった。その結果は次のとおり。

- ・ 就農に必要な借地、収入、最低限の初期投資、地区の応援者、借りられる農機具などの情報を集めて U・I ターンフェアなどで発信する。
- ・ **民泊と農業体験**だけでなく、酒蔵体験なども含めた企画会社を作る。
- ・ 半農半 X として手に職がある後継者を誘致する。
- ・ イチジクの自然栽培を行い高付加価値をつける。イチジク加工品の新商品を開発し全国・海外展開を計画する。

7. 第 5 回イベント「チャレンジ発表会」の概要とその結果

チャレンジ発表会の目的は、今までの 4 回のイベントで出された新たな仕事などのアイデアを更にブラッシュアップして実行性のあるプランづくりと、町内外の参加者が繋がり今後の地域づくりに寄与できるネットワークがつけられること（人的なつながり作り）であった。

これまでの 4 回のイベントで提案された 4 つの事業と、地域おこし協力隊の事業が「チャレンジ事業」として発表された。

(1)講演や発表の概要

○ゲスト講師：A市内のNPO法人代表

- ・ 関東からIターンして約40年になる。「困ったときはお互い様。地域に住むもう一人の家族になろう」を合言葉に、住民同士が助け合う活動を開始した。
- ・ H12年に介護保険制度が出来たのでNPO法人を立ち上げ、その後は介護保険とたすけあいの活動の組み合わせで、どんな支援でもできるようになった。
- ・ 移動困難者のための移送サービスも行っている。昔は道路交通法違反だと指摘されたが、H17年には認可団体による介護タクシーが可能となった。
- ・ 参加するよりも率先して動き、他人と繋がったら色々なことができるので、町を見直してもらいたい。そこにチャンスがあると思う。

○活動発表者：お魚捌き教室の活動・主婦

- ・ 第1回目の「海資源と仕事づくり」のWSの中で、お魚捌き方教室の案が出された。自分が教室を担うには不安があったが、ワカナの刺身と、郷土料理の柳かけごはんを作ろうと思った。
- ・ 昨年10月の第1回目捌き方教室には、地元の生徒さん6人。教室をビジネスとして考えると難しいが、魚は漁協から無償提供だったためできた。

○活動発表者：Instagram事業による情報発信活動

- ・ 第2回目の「商売と地域づくり」のWSの中で景観を活かした町づくりについて話し合い、「Instagramを使って町で撮影した写真を募集し、写真展をしたらどうだろうか」との意見が出た。
- ・ 掲載された写真の中から、良い写真を選定して定期的にブログで紹介していきたいと考えている。また、年度末には写真展を開催する予定である。

○活動発表者：農業体験と民泊・会社員

- ・ 第4回イベントのWSで「自分や子どもたちが楽しめること、地域を好きになれること」が大事と分かったので、地域を好きになれる活動をしていきたい。
- ・ 自分は現在58歳であり定年が近づいている。定年後、イチジク収穫体験や民泊活動を考えて、自宅前の空き家を民泊目的で購入した。

○活動発表者：「不便や」事業

- ・ 平成13年に東京から家族でIターン。都会での働き方こそ問題と考え、必要以上の便利さにお金をかけない「賢い田舎暮らし」を提案したいと考えた。
- ・ そのため町内で空き家を購入し、囲炉裏・かまど、明かりはローソクにし

た家にリフォームして「不便や」と命名した。事業は、貸スペース事業、体験イベント事業（火おこし、素朴な共同生活など）、民泊事業である。

- 活動発表者：半農半 X（エックス）事業の提案・地域おこし協力隊員
 - ・平成 28 年度から、地域おこし協力隊員として町で仕事。その傍らで、耕作放棄田を活用して「金魚の養殖プロジェクト」を実施中である。
 - ・イチジク栽培の 10a 当りの労働時間は週平均 15.5 時間。「田んぼで金魚養殖」だけでは収入が安定しないため、イチジク栽培を兼業することで年 60 万円程度の所得増が見込める。田舎暮らし志向の若者に対して、「イチジク＋（自分の得意な何か）」（半農半 X）を提案したい。

(2)ワークショップ結果のまとめ

WS では活動発表者と同じ 5 グループで議論され、各グループから提案されたアイデアは次のとおりである。

- お魚捌き方教室グループ
 - ・各地のコミセンの料理教室とコラボして生徒を募集する。特に料理が苦手な新婚の方に参加してもらおう。
 - ・動画配信により、町の魚のおいしさ・安さ、内臓にさわらないことをアピールし、一匹丸ごと調理から保存までを対象に調理の工夫を教える。
- インスタグラムグループ
 - ・町内外のインスタグラムユーザーに参加してもらおうため、釣り人、旅行者、鉄道オタク、写真好きの住民をどう仲間に入れるかを考える必要がある。また得られた写真データの管理方法を検討して、見える化・体系化が必要である。
- イチジクと空き家を活用した交流施設グループ
 - ・空き家の立地条件とイチジク畑を活かして、体験・食事・民泊活動に加えて、特に困ったときに助け合える場所にしたらどうか。
 - ・民宿開始の段取りとしては、民泊や体験の情報を収集し、協力者を多く作り事業方針の決定後、助成金を活用して施設を整備する。
- 「不便や」事業グループ
 - ・不便やでは薪割り、火おこし、水汲みなど、全部を利用者にやってもらう施設にする。さらに田舎体験としては、電気なし生活、塩づくり、火おこし、薪風呂、囲炉裏、魚釣り、海水浴などの活動が考えられる。
- イチジク農家の後継者誘致の仕組みづくり（半農半 X）グループ
 - ・イチジク栽培では冬場の 11~4 月は時間に余裕があるため、例えば酒造りや米作、建設業とも兼業が可能である。
 - ・イチジク生産の経済分析を学生参加で実施したらどうか。生活するのに

十分な所得があることを、数字で表現（見える化）する必要がある。

8. 考察と提言

(1) 目的との関連について

イベントの目的であった「地区に新たな仕事や地域活動が創出される」については地元住民から4つの活動が提案され、主体的に実施されていることは評価できる。

次に「地区の人と地区外の参加者が繋がり今後の地域づくりに寄与できる人的ネットワークがつくられる」については、表-2のように町内よりも他地区からの参加者が多くなったが、人的なネットワークが作られたことは評価できる。

表-2 参加者の内訳

回数	参加者 総数	参加者の内訳				WS 参 加者数
		町内	市内	県内	県外	
1回目	32人	16人	5人	8人	3名	25人
2回目	36人	15人	9人	10人	2名	26人
3回目	24人	13人	5人	6人	—	23人
4回目	28人	13人	8人	6人	1人	27人
5回目	31人	12人	13人	6名	—	28人

(2) 仕事づくりに関して

- ・ WSにおいて参加メンバー同士の話し合いにより「お魚捌き方教室、インスタグラム、イチジクと空き家の活用、不便や計画」の4事業が提案され、構想段階の「イチジクと空き家の活用」事業を除いて、町の創生計画から補助金が出され既に活動が開始されていることは評価される。
- ・ 一般的に WSにより相互交流や相互触発の効果（スクランブル効果）を受けてモチベーションが高まり活動提案が出されることは多いが、実際に活動を担う人が出ないため提案倒れになる場合が多い。しかし今回は、提案された活動を主体的に担う人が WS参加者内におられ、既に活動が開始されているため、持続性が高いと考えられる。
- ・ 活動の担い手の中の U・I ターン者の比率は、町外からお嫁に来られた人を I ターンとカウントすれば、4件中3件と非常に高い。町外出身者の新しい仕事へのチャレンジ率は、非常に高いと言える。
- ・ なお今後のこれらの活動に当たっては、それぞれの活動グループが相互に支援しながら行うことが合意されている。

(3)参加者分析と人的ネットワークについて

- ・ イベントへの参加者を分析すると、町内の参加者はイベント事務局の人がほとんどで、町外参加者の人数が多かった。町外参加者は、近年、関係人口と言われる「地域に住んでいなくても応援する仲間」¹⁾であり、ここでいう町外の人的ネットワークに当たる。
- ・ イベントにおける関係人口には、県外からの参加者も見られたが、彼らはイベントを受託した NPO の会員である。関係人口の参加者数が多かった理由としては、本 NPO の人材誘致ネットワークの強さと、東北大震災以降に顕著に見られる「地域に住んでいなくてもその地域を想う人たちの多さ」に関係していると考えられる。
- ・ 町内の参加者が少なかった理由としては、全戸にチラシ配布がされていたため集客方法の課題ではなく、町内の人たちの仲間意識や参加意欲が不足していると判断できる。今後、関係人口を活用しながら、町内の応援団を増やすような活動が望まれる。「**町内の応援団の増加対策**」
- ・ また町外参加者とのネットワーク（関係人口）は使わないと消滅してしまうため、例えば年 1 回の町内住民と関係人口が参加したイベントなどを開催し、関係性を持続させるような対策が必要である。「**関係人口の持続性確保対策**」

おわりに

5 回に亘る仕事づくりのイベントについての概要と考察を行った。

地元からのイベント参加人数は少なかったが、提案された仕事を主体的に行う人は参加していた。その後、地方創生事業から補助金が出されて事業が実施中であるため、今後、それらの事業が継続的に実施されることを期待したい。

引用文献

- 1) これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書 ―「関係人口」の創出に向けて― 総務省、H30 年 1 月